

# 中川根ふる里通信

## = 第39号 =

編集・発行・モアヲフ中川根  
 連絡先 〒428-03  
 静岡県榛原郡中川根町上長尾  
 中川根ふる里通信係 859-6  
 TEL 0547-56-0015  
 郵便振替口座 00870-4-81556



### 徳山神楽

町指定無形民族文化財  
 毎年10月10日の夜  
 徳山神社(お天王さん)の  
 お祭りに 徳山古典芸能保  
 存会の皆さんによって奉納され  
 ております。3ページ参照



## 五十年後の学級文庫

徳山国民学校六年担任

清水光雄先生



戦争と終戦で揺れる教え子の心の軌跡

八月十五日 朝日新聞より

この夏、千葉県柏市大室の清水光雄さん(六八)は、五十年前にたった一年間教えた子どもたちの作文を一冊の文集に手作りでまとめた。十八歳で就いた教職のその一年間に、戦争と終戦後の新しい時代が重なった。作文には、子どもたちの揺れる心の軌跡が読み取れる。心ならずも戦争に協力することを教えた日もあった。追憶と悔いを込め、還暦を迎えた教え子たちに文集を贈った。



子どもたちの作文を手にする清水さん。五十年たったいまもきちんと保存されていた「柏市大室の自宅」。

## ワープロで清書し作る

1995年(平成7年)8月15日  
終戦記念日 特集記事より

「恐怖や空腹に苦しむことなく、思いきり子どもたちを教えたかった。平和だったら……」。清水さんは終戦前後の教員生活をそう振り返る。

家が貧しく、師範学校へ進めなかったため、働きながら教員資格を取った。十七歳だった。

一九四五年(昭和二十年)四月、静岡県徳山村(現中川根町)の徳山国民学校初等科六年生の担任になった。疎開児童も加わって教え子は五十四人。廊下にも机を並べていたのを覚えている。

上空をおびただしい数の米爆撃機B29が、引きずるような低い音を立てて過ぎた。そのたびに子供たちを連れて防空ごうに駆け込んだ。

文学を教えるのが夢だった。紙が手に入りくい時代だったが、おりに触れて作文を書かせた。

戦争には疑問を感じていた。しかし警察や憲兵に目を

つけられれば、教員資格をはく奪されるかもしれない。

苦勞して取った。どうしても手放したくない資格だった。

「勝つこと」「忍ぶこと」も教えた。

「自分の身は粉みじんじんに砕けるとも、皇国護持のために笑って散って行く……」。この心、この精神があるから、日本は強いのだ。勝つのだ。「皇国に生を受けた喜びにあふれ、何度も何度も、私は『兵隊さんありがとう』と言いつつ続けた」。

子どもたちの作文には勇ましい言葉が並んだ。

その夏、終戦を迎えた。新学期からは、これまでの教科書から離れ、俳句を教えた。子どもたちは、せきを切ったように花や山、川、鳥をのびのび詠んだ。

「夕月やはこのうさぎも とび出たす」  
 「秋晴れや とんぼがすいすい うかれたす」

終戦から間もない秋の旬には、想像していた暗い影や敗戦の悲しみはなかった。「子どもたちも、心の中で戦争が終わるのを待っていたんでしょうね」

教師生活は、その児童たちが卒業した三月で終わる。教師になる前に一年半、中国で軍の給仕をしたことで公職追放となったのだ。

その後は長らくサラリーマン生活を送った。現在は引退している。教え子たちの作文は一年だけの教員生活の思い出として、大切にしていた。

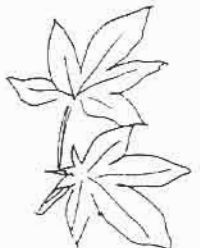
「作文をただ持ち続けていただけではないのか」。歳月が流れても、戦争をたたくえるような授業をしてしまった悔いが残っていた。戦火のなかで、満足のいく教育ができなかったことをわびたい気持ちもあった。

「もう一度きちんと振り返ろう。教え子たちにも思い出してほしい」。そんな思いで、俳句や作文をワープロで清書してコピーし、B5判五十ページにまとめた。できあがった五十年目の文集を今月から、連絡先が分かった順に教え子に送り出し始めた。

文集を受け取った教え子の神奈川県相模原市在住の茶販営業竹本俊三さん(六一)は「当時のことを思い出しました。これを機に先生を囲んで同級生が集まれば」と話している。

子 録

去、十月十四日東京、両国、江戸東京博物館にて行なわれまし。ふるさと東京まつり。にお伺いした際、竹本さんから書面をおあずかりしたものです。



徳山神楽について

徳山神社に伝わる神楽は、江戸時代中期以前に定着し、「とくやまかぐら」と称されて代々氏子に伝えられてきたものと言われています。

神楽歌を記した文書で、現在残っている最も古いものは、延宝二年(一七四四年)のもので、現在残っている最も古いものは、延宝二年(一七四四年)のもので、定宝というとい、四代將軍家綱の時代で江戸に歌舞伎が確立されたころにあたりま。

神楽式は、修祓、降神式から始まり、昇神式まで一貫した儀式が行なわれ、中で「神の舞」「倭舞」など十六の舞が舞われます。創始の時代は明らかではありませんが、系統の上からは伊勢流の神楽といわれています。

祭典は、毎年十月十日の夜、徳山神社で行なわれます。当日は、午後四時半頃、関係者全員が、当屋に集合、清めの式、四座の舞を行なったのち、神社までの道行きが始まります。囃方の笛、大鼓の道行きの調べにのって、先頭は天狗(天狗は猿田彦大神を象徴し、神話に基づいて手には大きな杵を持って神社までの道案内をします)巫子、舞子、神職と続きます。列中には、恵比寿、大黒の道化の舞を舞いながら、見物の人たちを笑わせています。

神楽は、拝殿に設けられた神楽殿で行なわれます。男子は白衣、烏帽子、直垂、袴、白足袋、女子は白衣、緋袴、白足袋、舞は巫子による優雅な四座の舞、刀を手に勇壮な剣の舞、鬼の仮面や恵比寿、大黒などの面をつけた面の舞、右手左手に松明をもち、燃えさかす火の粉の中で、笛、太鼓に合わせての華やかな「火の舞」などが行なわれます。このように多くの種目が残され、降神の式、神楽式、神送りと一貫した儀式が行なわれる神楽は珍らしく、貴重なものと言われています。



# ふる里との係わり合い

西田 亨 司 (徳山出身)

失礼をも顧りみず、三度目の投稿です。これも編集者のご理解は基より、当誌の益々のご隆昌の一助という私の些の老婆心によるものであることとお受け止めいただければ誠に幸いです。

そろそろ還暦が近づいている年今になりますと、人間誰れしも老後の事や、自分の過去に思いを馳せるのも自然の成り行きであると思います。でも一方年の事などおおよそ眼中になく、前進あるのみと日々のお仕事に夢中で、気を休める事すらない充実した人生を送られている人も一部おられるのも事実であります。

こうした中で、私は、前者のおそらく多数派の一人として、ふる里を懐しみ、昔にタイムスリップしたり、又同時に今の自分を思います時、ふる里が少年時代の自分に知らず知らずのうちに大きな影響を与えてくれたことが分かります。私はその数ある影響因子のうちで、功・罪一つずつをここで取り上げてみたいと思います。

罪的な捉え方をして甚だ恐縮ですが、その一つは、方言「地方ナマリ」のことです。

よく川根地方に代表されるのが、ズラ言葉や独特のアクセントです。この習性は一朝一夕に直るものではなく、私も若い頃随分都会派の人達から笑われた



ものです。このクセを人前では出さないよう、会話の中でのかなり気を遣っていた頃もありました。でも心配するまでもなく、この言葉のクセも時の流れで少しずつ矯正されて行きました。

私は学生で東京在住の頃、東京人のきれいな日本語「標準語」に接し、羨しくさえ思いました。話は逸れますが、言葉の文化というのには不思議なもの、東北弁や九州弁のナマリは大変有名ですが、それより遠い北海道の札幌は、ミニ東京と呼ばれ、早くから東京の文化が進出し、土着した関係もあって標準語に近いと言われています。

さて私は、その後、結婚し子供が成長し一家を構える様になるとどうした分けか、自分中心の世界が出来た気のゆるみか、家族との会話中、川根ナマリが時々出没し、妻子から笑われて、恥すかしい思いをしました。

最近、実家の孫たちの会話を聞くにつれ、観察しておりますと、川根ナマリも気にならないうちに少なくなっているようです。これも高学歴化社会、高度情報化社会になり都会との距離感がなくなりつつあることで、結構なことだと思います。

それは社会に出て余分なハンディを背負うこともなく、気遣いしなくて済むからです。しかし申添えますが、方言を俗文化として、簡単に片す







「もう一度母に会いたい」

——わたつみのレイテの海からの叫び——

長濱 寛二郎

「もう一度母に会いたい」

これは、わたしの兄が戦陣にのぞみ、再び生きて還れぬと覚悟し、遺言をしたため別れに際して残していったことはです。

昭和十九年十月、フィリピン、レイテ島に反攻、上陸してきたアメリカ軍をせん滅すべく、空と海と陸から、日本軍の総力をあけての激戦が展開され、空からは特攻機が体当たりを取行し、陸では援軍が続々と投入され、海では、「興国の興廃この一戦に在り」と捷一号作戦が發動され、連合艦隊の最後力をふりしぼって、レイテの海で壮絶な海戦、死闘が行われました。兄は、西村艦隊の旗艦「山城」の乗組員としても奮戦しましたが、壮烈な戦死を上げ、一六〇〇余名の兵士とともに艦と運命をともにし、レイテの海深く、二十二歳の青春を国に捧げ、生きて再び還らぬ人となってしまいました。

「もう一度母に会いたい」

兄の悲痛の叫びが、はるか南のレイテの海の底から聞こえてきます。過ぐる年、わたしたち兄弟は、慰霊団の一員として、レイテの海を訪れ、母の写真を投下し、兄の鎮魂を祈り、紺碧にして、波静か、平和そのものの海の底に眠る兄に呼びかけました。

「かあさんが会いに来たよ。」と……  
その母も今は亡く、十有余年の歳月が流れました。

思えば、生涯土にまみれ、土に生き、節くれたったあかぎれた手で、十一人の子を生み育ててくれた母で、小学校四年しか出ない無学で貧しい身で、たが、子どものために、すべてをそそいでくれた慈悲深い母でした。「からだを大事になし」「正直でなければだめだよ」「仕事を大切にしろ」と、いつも言いきかせてくれた母。兄の戦死の知らせがとどいた時、悲嘆の涙にぬれ、たにみにひれ伏し、じっと耐えかねて動かぬままの母の姿が忘れられません。

時の流れは茫々として、すでに戦後五十年、母と兄と過ごした幼い日のことどもが歳とともによみがえってきます。その母と兄は、呼べと答えぬ幽明の彼方で、共に会い語らっているのです。うか、ふたりの面影が二重うつしになってまぶたに浮かびます。

うつつせみの人の世の非情な戦は、母と子の強い絆を断ち切りました。憎みても恨みても時の流れに流されていきます。わたしも、この歳になって、「もう一度母に会いたい」。そして「兄に会いたい」と、かなわぬ幻影を時として夢みながら、平和の尊さをかみしめ生きております。

恨みても憎みてもなお遙かなる

戦の傷いゆる時なし



中川根町教育委員会月刊誌  
社教の窓

中川根心のエッセーより

物の大切さ

鈴木美代



「昔の人は一粒のお米も大切にいたものだよ。例えば便所の踏み板に落ちてゐる米さえ拾って食べたぞうだよ。御飯を粗末にすると目が潰れる。一粒でもこぼさないよう、感謝の気持ちで頂かないと、御先祖様に申し訳がないよ。」  
子供の私達に理を諭し、物の大切さ、感謝の心を教え込むという毎日でした。食事は勿論、身につける物一切が万事この調子でした。

針数え糸巻揃える日向ぼこ 美代

冬の日向ぼこには、色とりどりの布や仕事着、それに爪先の破れた足袋などが持ち出され、母は修理に追われていました。「お母さんの鎧足袋」と子供達の呼ぶ足袋は、昔の鎧の袖の様に綺麗に刺してあり、それは新しい足袋よりも温かで長持ちしました。「お母さんの鎧足袋」と親しまれ愛用されました。

ある日押入の中に頭を突っ込んで何か探し物をしていました。「何してゐるの」と聞くと、「近所の嫁さんが急に産気づき、今にも産まれそうだと云うのに何にも支度がない」と大急ぎで、お産に必要な物や産着を調べ、やがて大きな包みを持って出て行きました。

常に継ぎ接ぎだらけの物を身につけているのに、いざと言う時には惜し気もなく他人にやっておりました。

継ぎ接ぎの野良着に畑を歩む時

亡き母忍ばれ心安らぐ 美代

時は大正の終わりから昭和の初めにて、アメリカに端を發した不景気は世界中を駆け回り、日本も例外ではなく、取引銀行が破産し、父の材木商が不渡りを食い、生活はどん底に落ち、父も東奔西走していた様でしたが、母の才覚にてなんとか苦境を切り抜ける事が出来たようでした。

ただ今、七十六年の歳月を振り返って、しみじみ「物を大切にする」教えが胸に浮かびます。

中川根心のエッセーより



「毎月一回、社教の窓」が新聞折込の中に入ります。内容は一ヶ月の社会教育の案内や、スポーツ大会の結果などですが、今年四月より「中川

根心のエッセー」が載せられています。ほのほのと心にあたたまるエッセーが読者に人気です。

今回皆様にご紹介致しましたお二人は、奇しくも徳山地区にお住まいで、しかも他の地から移り住んでこられた方です。長濱寛三郎さんは、金谷からお婿さんにこられ、(長い間、学校の先生をされて、現在徳山区長)鈴木美代さんは、三十年位前藤枝から一家そろって引っ越してこられました。お二人とも中川根にすっかり根をおろして各方面に活躍されております。

中川根出身の方々にとって、川根はふる里、という意識と同じく、お二人も、それぐふる里があるのです。それと、町を出て行く人達が圧倒的に多い事は確かですが、他の地より中川根に入って来る方々も少くすつ増えているのも、近年の特徴ともいえます。そして、中川根をふる里と思つて下さる皆様は、中川根ふる里住民(人)ですね。

役場の町民ギャラリーにて九月末から十月

上長尾出身の河村千枝子さんが(旧姓、春沢)

「バッチワーク手芸展」を開かれました。

一針一針縫い上げていくバッチワークは大変な時間を

要します。河村さんの作品はオリジナルなものばかりで、

真に芸術と感嘆しました。「西国巡礼」「島田帯祭」「尾瀬

水芭蕉」「鹿ん舞」(製作途中)など見事なものでした。

河村さんからのメッセージをお贈りします。

### バッチワーク手芸

定年後内職仕事の傍ら(第二の人生)生

涯学習で、私の出来ることはないかと思

ミシン掛や針仕事の好きな私が、見付け

たのがバッチワーク手芸でありました。

楽しみながら何時でも夢を持って、



あれも、これも作ってみたい。この作品も出

来上がったと、一つ一つの姿に、形に、苦勞し

て仕上げた喜びを噛みしめて、時のたつ

をわすれいつの間にか十年の月日が過ぎて

日常生活にも役立ち、過ぎし日の思い出か

バッチの形や作品になつてきています。

お姉さんにももらった着物、友達がくれた布

旅行にいった先々で見付けた布、古着やで買

った布をすくすく取り入れて作った物を見

ると、その時々思い出が甦り夢を膨らませ

ています。バッチの教室、展示会にと暇をみ

つけては、何か良いものを見出たす楽しみを

心を弾ませて見学に出掛けていきます。

教室での年一回の展示会も楽しみの一つで、

同じ趣味を持った友達も大勢出来ました。

このたびギャラリーをお借りして、友人、

夫の協力をえて夢のよう、故郷の皆様

みます。

役場の皆様お計らいとお

世話下さいます。展示会の

出来ました事ありがとうございます。

御座います。

河村千枝子

島田市在住



東京のかたすみから(11)

テレビの始めから終りまで

事件の裏方

渡邊 實夫



今から二十四年前のこと。昭和四十六年七月三十日(金) 世界最大の航空機事故が発生した。

その日編成から走って来たデスクの大石芳久君から、「未確認情報ですが、また飛行機が落ちたらういすよ。」と報告を受けた。報道では確認中とのこと。即ちニース

契約を以ていた朝日新聞・共同通信・時事通信・記者を出している警察庁・警視庁・防衛庁・運輸省・羽田オペレーションセンターなどへ問合せ中。この中から同じ情報が

二つ以上入ると未確認が消えて確認と云うことになる。テレビ中継回線を担当している我々進行課は、墜落現場

の映像をどうやって東京へ持ってくるかを検討するため、全国テレビ中継回線網マップを開いて大急ぎで準備に入った。

現場を特定出来れば直ちにN-T-Tとかけ合せてテレビ朝日迄回線設定をするのである。

間もなく岩手県下の山奥らしいと云う情報が入った。私は頭の中で、岩手県の海岸ではないだろう、そして山岳

地帯であれば深い山中の現場からN-T-T盛岡テレビ端局(中継局)へ送り込んで更にそこから東京へもってくるの

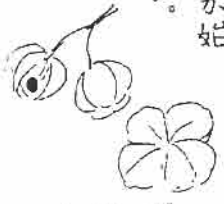
が良いだろうと考えた。そうなるも盛岡から東京へはテレビ回線が一本しかないから、この回線の争奪戦が始

まる。遅れて他のテレビ局に取られてはならない。何が何でも『先願優先の原理』早い者勝ちである。今は一刻も早く申し込み独占しなくては

ならない。私の頭の中は、今度こそは、と緊張した。実は、この事故の起る二十七日前の七月三日(土) 夕方、北海道札幌市の丘珠空港から函館空港へ向った東亜国内航空の63便YS11「ぼんたい」が乗客六十四人を乗せたまま消息を絶ち、全員無残な姿の遺体となって収容されると云う痛ましい事故が起きたばかりであった。その時は、我々はテレビ中継回線どりが遅れ思うように取材が出来ず、他局に負けてしまった。それ以来、神経がぴりぴりしていたのである。

さて、この日は第一報が入ってから十分位した二時三十分頃だったろうか、我々が岩手県内のテレビ回線の概要をようやくつかんだ頃、編成部長北代博氏から連絡が入り、「本日午後二時四分頃、羽田空港から千歳空港に向った全日空58便が、岩手県栗石町上空で自衛隊F86ジェット戦闘機と空中衝突、両機とも付近の山中に墜落した。全日空機の乗員乗客百六十二名(うち百二十五名は静岡県吉原遺族会会員)は全員絶望とみられる」との事。墜落した全日空機は727-200と呼ばれる長胴型機、全員死亡とすれば世界最大の航空機事故であり、又空中衝突による墜落事故も、わが国では戦後ほじめてのことである。写真はその時朝日新聞に載ったものである。

私は、この事故は有事優先の自衛隊機の訓練のあり方、民間軽視の自衛隊の体質にメスを入れられる大事件になり、単なる旅客機のトラブルでは済まないものと直感した。私は即座に独断で、盛岡→東京間の一本しかないテレビ回線の使用を、九時間に及ぶ全時間を申請するよう大石君に指示した。N-T-Tは未だ事故発生を知らないらしく静まりかえっており、すんなりと確保できた。その後間



もなく、現場からは「空から人が降って来た。スチューワーズが  
高い樹木に引っかかっている。清流が血に染まっている……」など  
惨状が次から次に入ってきた。

先手をとられた各局は大慌て、テレビ朝日がテレビ回線を  
独占するなんて今までなかったことが起ったのであるから、先  
ずNHKから夜七時のメインニュースに現場の映像が出せな  
いから、テレビ朝日の回線を貸してくれ、と申し出があった。  
引続いて日本テレビ、フジテレビ、TBSからも特番編成を  
組みたいから回線を貸して欲しい旨要請がきた。

私は好んで独占したのではない、先回、テレビ回線の少ない  
北海道で「ぼんたい」遭難事故が起きた時、東京へくる回線  
のとり合いで大混乱した。各局合同の反省会の席上、私は、  
テレビ制作回線の少ない現状では「先願優先の原理」はま  
ずい、少ないテレビ回線を仲良く分け合って使うべく、「話し  
合いのルール」でやるべし。と提案したが、「報道は競争  
なり」との一言で受け入れられず、おろかにもこの時まで  
戦国時代は終ることなく続いていたのである。かかる事情  
から今回の選抜となり独占した次第である。

この独占が大騒ぎとなり、私の『大井川であゆふり』と  
と云う楽しみにしていた夏休みは消え失せてしまったの  
である。それは、私がニュースや特別番組に出演したり、企画、  
制作、進行、出演者交渉、航空評論家探しをする為に必要  
だったわけでは全くない。そういうことをするプロデューサー、ディ  
レクターなど有能な社員はゴマンといるのである。こういう  
時は飯より好きな連中の集まっているテレビ局ゆえ、声を  
かけなくても要員は集ってくるのである。上は役員から新  
入社員まで、必ずと言ってよい程、大事件とみると動物の感  
覚を働かせて集まると云う習性があるのである。余談だが

# 自衛隊機の航空路侵犯に原因

## 全日空機との空中衝突事件



機体はバラバラ



全日空機をじゃ、見張り怠つ

避けられぬ政治責任

自衛隊機の無法地帯

異常接近 冷淡な防衛庁

日本の空

がうまくゆけば、俺がやった、俺がやったと豪語し、失敗する  
と静まり返って責任者不在になるのが常であった。そんなわけ  
で人手が足りなくて私を必要としたのでは全くない。  
ところが責任者不在で通らないことが起ったのである。テレ  
ビ朝日が一本しかないテレビ回線も長時間押えてしまって、他局  
に妨害を与え、報道の自由、表現の自由を侵害してけいから  
んと云うのである。

報道の自由とはニュースの取材、選択、編集、表現の自由を誰か  
らも拘束されることなく行い、視聴者の知る権利に心をこめ、  
と私は思う。報道の自由を犯したなんてとんでもない話で  
他局は初動体制が悪く取材ルートを先取りされたに過ぎない  
のである。東京各局は会議と云う名でテレビ朝日を否、

上記事件の裁判の最終判決が今年出てたし自衛隊員(元)世界  
にたように気候しています。(編集後)

独占した張本人の私をやっつけようと東京に釘づけしたのである。特に攻撃の急先峰となったのは、一時日本テレビの専務でもあったが、テレビ回線を扱う回線運営センターの理事をやっていた松本幸輝久氏であった。彼はテレビ初期の回線の面倒をみたと云う自負からか、テレビ回線の私物化ともみられる強行発言を繰り返してきた。松本氏のわめき方は烈火の如くで、吠えれば吠える程私は何故そんなにくやーがるのか疑問がわき、時にはそんな彼に同情する気持ちさえわいてきた。

私はテレビ各局との会議というつるし上げには、耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍んだ。そして、これまでテレビ界は無言のうちには序列のようなものがあって、この秩序、慣習を後発局に崩されるのが怖いのだと云うことがわかった。

その後、数十回におよぶ各種会議の末、出てきたものは、なんと私が本事件の前に提案した『競争原理の修正版』とも云うべき『仲良しルール化案』であり、それで一件落着いた。全く馬鹿げた半年以上に及ぶ月日であった。時既に大井川や川上(春野町)の杉の沢のあゆは下<sub>さ</sub>ってしまひ、落ちあゆの姿もみられない川根はすっかり冬化粧になっていた。

そんな針のむしろの上には私に、「おいメシに行こう。」と云って、麻布の老舗<sup>いんじ</sup>へつれて行って「良くやった。」と云って励まし元気づけてくれた男がいた。かの有名な取締役編成局長の三浦甲子ニ氏であった。後に彼は「オリンピックなど大きな国家的行事をNHKだけがやると云う慣習はけしからん。」と云って放送界が猛反対の中、自らモスクワに出掛けてソ連首脳と交渉し、オリンピック放送の独占権をテレビ朝日に

とってきた人物である。

現在テレビ中継回線を担当している編成運用部副部長黒田宏君によると、十年前の『御巢

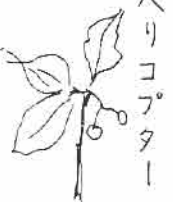
鷹山の日航機墜落事故』の時にもテレビ朝日が運良く独占に成功して他局に分けてやったとのこと。「これも先輩達が道を切り開いておいてくれたおかげ。」と云われ私は正直嬉しかった。会社の伝統とは先輩から後輩にこのようにして受け継がれて行くものである。

話は全国テレビ中継網に戻るが、鉄道と同じように東京を中心として北は北海道、南は九州まで東京のテレビ局の数だけ電波ルート(番組ネット回線)が張られている。鉄道は複線で再び車輛が東京へ戻ってくるが、テレビの場合は放送したラ戻す必要がないので殆んど単線である。従って地方、避地で事件が発生すると東京へ現場の映像を持ってくる電波ルート(制作回線)をその都度組まなくてはならない。このテレビルート一本が電話線の千五百本に相当するので、お金の点からも常備できないのである。

最近のテレビ中継では各テレビ局が通信衛星CS(BSではない)によるテレビ中継回線を常設しており、事件現場で南の空へ向け送信すると自然に東京のテレビ局で受信される仕組みになっており、この種のもめごとは殆んどなくなっている。

川根の皆様は二十八年前の昭和四十三年二月に起きた金嬉老事件——清水で殺人を犯して寸又の『ふじみ屋旅館』に十三人の人質をとって立てこもった——をご記憶でしょうか。実はこのテレビ生中継はお手上げだったのである。それは周囲が深い山にかこまれたあの寸又の窪地からはテレビ電波が抜け出せず東京へ届くことは不可能であったから、私の経験では生中継できなかった大事件は他に知らない。今ならふじみ屋旅館の真上からヘリコプターでテレビ中継が出来るところである。

一九九五年十月二十六日 記



## ふるさと夜話

## 大日峠水呑茶屋のおばさん

原田耕作

この話は大井川奥、井川村の五十年前の話です。ふるさととは言えないが、井川は大井川の一すじの流れによって連なっている川根地帯の隣です。大きな意味から大井川のふるさとというお考えで、お読み頂ければ幸いです。

昭和三十二年大井川電源開発と共に、新しくできた富士見峠を井川林道が通る迄、静岡安倍方面と井川との往来は、大日峠の急坂を歩く以外方法は無かった。

大日峠は標高一五〇米、南麓の集落口坂本から約四キロメートル、つま先上りの細道を登って峠へ達し、四キロ下って大井川畔の井川本村へ出た。上り一里下り一里と言ひ、この峠を一回越えると新しい木綿の靴下の底に必ず穴があいた。寒中雪の峠を越えても汗が出た。夏の峠は汗だくなく、下衣を用意して行って峠の茶屋で着かえなければならなかった。

昭和十六年夏、突然、心召された井川駐在所の俊任に私が命ぜられた。当時静岡警察署管内には召集されて巡査不在の駐在所が三ヶ所もあったが、井川は静岡から四十八キロと遠隔の避地、その上に、東海紙料井川事業所を筆頭に、加藤林業、③林業、大カ林業、金沢鋳業井川金山、間組事業所等、事業所が多いため巡査不在では置けなかったと言ひ。

警察へ入って、わすか三年目、囃の黄色い私に駐在所



勤務が務まるかと不安があったが、元々山家育ち、何とかなるだろう。当ってくださった。と赴任した。昭和十六年八月から十八年三月まで一年六ヶ月、その間月に二度は必ず大日峠を越えなければならなかった。

峠の秋は早く安倍の村々より半月早く野菊が咲いたのにおとろいた。峠の春は晩く落葉松の芽生えが山麓より一ヶ月もおく



水るのだった。大日峠の頂上から少し南側へ下った所にたった一軒茶店があった。これが水呑茶屋という茶店である。茶屋の裏に樹齢二百年と言ひ杉の大木があった。その根元からこんこんと清水が湧いていた。

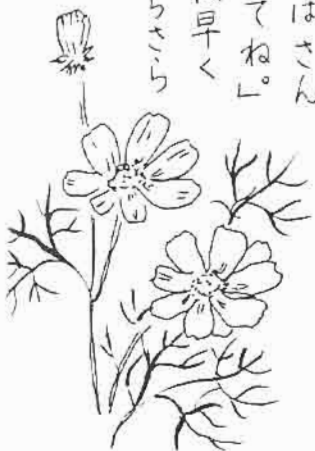
茶店を守っていたおばさんは、五十の坂をいくつ越えたか物腰の静かな、チヨット美人のおばさんだった。私は峠を越す度に茶店へ寄ってお茶を呑み、時には、駄菓子をつまんでおばさんの話を聞いた。峠を越す人は意外に多く一日五十人の出入りがあるとのこと。私は職務の関係もあったが、世間話としておばさんの話を聞くことがたのしかった。

私は井川に赴任した当初、水呑茶屋に立寄って、こんな人里離れた峠の一軒家に、たったひとり住んでいるおばさんの大胆さに驚いた。おばさんは七年前夫と死別、その後ずっとひとりでこの茶店を守っているという。最初は淋しかったが、追々ひとり暮らしに慣れて何共無くなつたと言ひ。永年住み慣れた土地の愛着は淋しいことも恐いことも忘れさせるのかとつくづくおばさんの優しい顔を眺めて感心した。つだが、おばさん、泥棒は金銭ばかりじゃないよ。おばさんはまたまた水々しい美人だからおばさんをねらう泥棒がないとは言えない。



もし、そんなことがあった時おぼさんはどうするつもりか。と聞いてみると、おぼさんは笑って、「こんな婆さんをねらう泥棒は無いでしょう。もしあったとしてもそんな時の心得を知っています。以前柏さんと言う巡査さんから教っております。」と言う。

成程、柏さんという巡査の事を私も聞いている。井川の一本縄殺し事件で活躍した名巡査だったと言うことを聞いていた。その柏さんは一体何をおぼさんに教えたのだらうと聞いてみると、おぼさんはコロコロと笑いながら、「思いきり強く男の急所を掴むことですよ。」と言う。成程、柏さんはその手を教えたか、男の象徴金の玉をキューと握られると絶体絶命男はどうにもならない。離しても痛みがとまる迄は時間がかかる。その間に外へとび出せば隠れる所はあるし、県有林の事務所まで行けば管理人一家が泊っているとと言う。なる程、県有林事務所があるのか、それならますます不安だ。しかし、ナーおぼさん、それが一番良い防衛方法だが、それには充分落ちつきが無ければできない事だよ。間違えて隣の棒を握ると失敗するよ、と言うとおぼさんは真剣な顔になって、「私はひとり者で何年にも棒など握ったことありません。」と言った。その真剣な顔を見て、この度胸があるからこの淋しい峠の茶店が守れるんだナと感心した。「感服したよ、おぼさんの度胸に。だが充分気を付けてね。」と言って私は茶店を出た。秋早く黄色くなった落葉松の葉がさらさらと時雨の様に音立てて茶店の屋根に降り注ぐ日であった。



10月14日、15日、東京両国  
江戸東京博物館にて  
第14回「ふるさと東京まつり」  
におじゃましました。



10月初め、茶茗館より、ふる里通信東京近辺在住者の皆さんに、まつりのご案内をいただいたからとの連絡がありましたので、皆様をご紹介しました。後日、同行依頼がまわりましたので、14日1日間お伺いさせていただきました。当所ははじめてでしたので、見学出来てよかったです。

10月中旬にしては大変暑い日でした。おいそかしいなか、大勢の皆様のご来店をいただき、本当にありがとうございます。しは、し、川根の味を味わうことが出来ましたでしょうか。これからも、この様な機会がありましたら、田舎の「気」を一杯孕んで、どこへでも気球の様に飛んで行きたいです。そうすればいいですね。



その後平和な水呑茶屋では、おぼさんが泥棒の金の玉を掴むという事件は起きなかった。昭和十八年三月、一年六ヶ月の短い駐在で私は水呑茶屋のおぼさんとも別れなければならなかった。その後十七年の歳月が流れて、井川の電源開発が進み大日峠を往き来する人は無くなった。やむを得ずおぼさんは涙と共に峠とも茶店とも別れたと言う。その後、聞くところによるとおぼさんは老人施設へはいって、そこで余生を終ったということだった。



### 定期購読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部 千円 150円

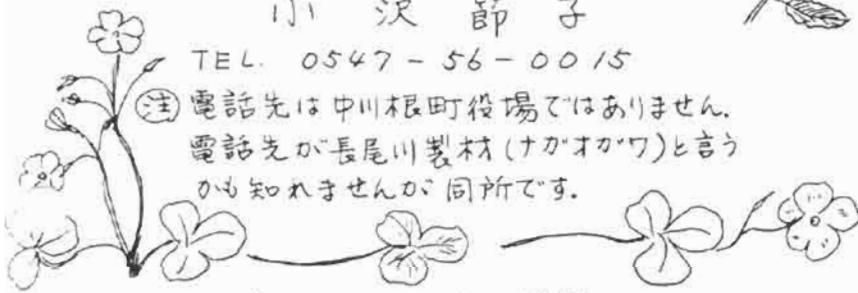
皆様の定期購読がふる里通信の発行を支えます。年間4回の発行(季刊誌)を予定しております。今回で購読の切れる方初めてふる里通信をご覧になれる方には郵便振替用紙を同封致しますから、引き続きご購読をお願いします。年間予約600円(150円×4回)のご送金をおすすめしますが、3年分位(1,800円)でもお預り申し上げます。購読を止めたい時や、住所変更のおりも是非ご連絡下さい。

郵便払込通知票 00870-4-81556  
 加入者名 中川根ふる里通信係  
 ふる里通信に関する問い合わせ先・  
 発行責任者 〒428-003  
 静岡県榛原郡中川根町上長尾 859-6

小沢 節子

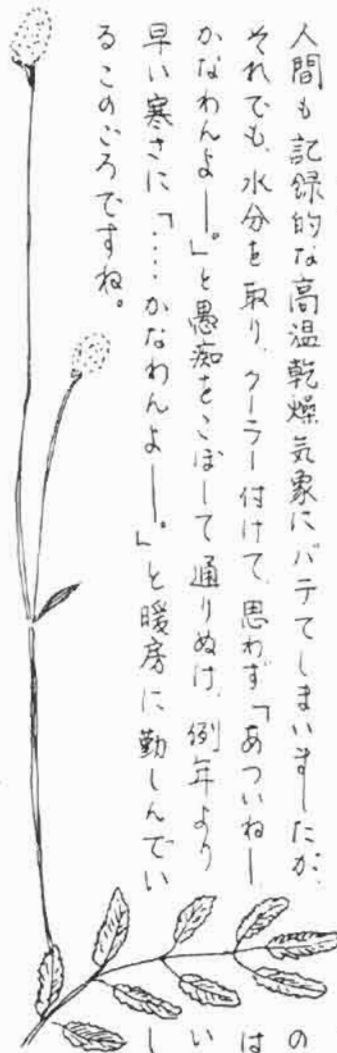
TEL. 0547-56-0015

(注) 電話先は中川根町役場ではありません。  
 電話先が長尾川製材(ナカオカワ)と言う  
 かも知れませんが同所です。



ふる里通信を始めて10年、皆様の大きな励ましに助けられて、何とか続けてまいりました。紙面、内容、その他、行き届かない点が多いと存じますが、今後も、継続して行くつもりですから、どうぞよろしく願います。紙面上に載せたい事、寄稿、など、としどしお寄せ下さい。皆さん全てが企画委員です。

10年ひと区切り、と申しますから、次回号から購読会員名簿など、何回かに分けて載せて行きたいと考えます。会員名簿発表をひかえていた方が、ご一報下さい。又会計報告は42号にさせていただきます。



秋深し、好天の日が続きます。草木の色付きも里まで降りて来て、今が盛りです。初夏から初秋までの降雨の少なさ、気温の高さが、年間平均雨量三〇四〇mmの当地方の樹木に影響を与えております。杉、松の人工林や茶園の樹が赤く変色していますし、樟など、の広葉落葉樹は、例年より多くの実を付け、秋早々に葉を枯らしている状態です。樹木が脱水状態を起してしまつたようです。

人間も記録的な高温乾燥気象に、バテてしまいがちですが、それでも、水分を取り、クーラー付けて、思わす「あついねーかなわんよー」と愚痴をこぼして通りぬけ、例年より早い寒さに「…かなわんよー」と暖房に勤しんでいるこのごろですね。



自然界の営み、天災としてかたづけられるには、窓から見える景色は痛々しく感じます。来春、変色した木々が、自分の力で、新芽を吹いてほら、と祈ります。

亥年は、陰陽五行の暦の上で、全てが滅びる年に当たります。そうです。年明けと同時に阪神大震災、サリンガス事件、オウム真理教捜査をして不況と、めつたにない事が起きましました。それにしても、ハルマゲドンと言う事が起きなくてよかったですね。子年は「地雷復讐」長くつづいた困窮の果に、はじめて一条の希望の光を見出したとき、「一陽来復」とは不幸つづきの後に幸福が訪れたとき、「一陽来復」という……、もうすぐ新しい年が訪れます。期待致しますよう。